

「築き上げられる聖霊の宮」

エペソ人への手紙 2 : 20 - 22

August.21.2022

エペソ人への手紙 2 : 20 - 22 (パウロ)

Preface

前回このエペソ書 2 : 20 - 22 の御言葉から、教会は、神の御言葉という土台とキリストを要の石とする生きた建物だということを学びました。

そして今日は、同じ聖書箇所から、もう一つ、教会は聖霊の宮であるということを確認していきたいと思っています。

宮というのは、旧約聖書で言います神殿であり、幕屋です。

旧約聖書のイスラエル民族の信仰生活は、神殿と幕屋を中心に成り立っていたと言っても過言ではないぐらいに、神殿がとても重要な意味を持っていました。

第一列王記を見ますと、イスラエル民族念願の神殿建築を終えた後、ソロモンが主なる神様に献げた祈りが記録されていますが、その祈りの内容を見ますと、神殿とは何なのかが良く表れています。

列王記第一 8 : 29 - 30 (パウロ)

「わたしの名をそこに置く」と神様自ら仰ったのが、神殿です。

つまり、神殿において最も大事なことは、そこに神様のご臨在が現れているということです。

だから、神のご臨在下さる神殿に向かって祈ることが出来、夜も昼も御目を開いて聞いてくださる神様に期待して祈ることが出来ると言うんです。

そしてこれが、新約時代に入りますと、この神殿に成り代わるのが教会であり、その教会は、旧約時代に神が臨んでくださったのと同じように、聖霊が臨んでくださる神殿、宮だと言うのです。

だとすれば、教会が聖霊の宮、神殿であると定義出来るならば、キリストのからだ、生きた建物、生命共同体である教会は、何を追求し、どうあらねばならないのか？という質問をもって黙想してみますと、二つのことが思い浮かびます。

Part One

一つ目は、神のご臨在を渴望する共同体でなければならないということです。

詩篇 42 : 2 (パウロ)

詩篇 63 : 1 (パワポ)

この二つの詩には、共通点があります。

二つともダビデの詩であり、二つの詩とも、ダビデがあまりにも心が辛く、大変な困難の中に居た時に謳った詩だということです。

詩篇 42 篇は、ダビデからサウル王から不条理な濡れ衣を着せられ、命辛々逃げ惑わなければならなかった時に書いた詩であり、詩篇 63 篇は、もっと悲惨な状況です。

息子アブサロムが権力に目がくらみ、父ダビデの首元に短刀を突きつけるかのようにクーデターを起こし、何もかも捨てて逃亡しなければならなくなった悲惨極まりない時書いた詩が、詩篇 63 篇です。

この二つの詩は、絶体絶命の苦難の時に書いた詩であるという共通点がありますが、それよりももっと大事な共通点があります。

それは、その解決方法が同じだということです。

詩篇 42 : 2 (パワポ)

「私のたましいは、神を、生きる神を求めて渴いています。」

詩篇 63 : 1 (パワポ)

「私のたましいは、あなたに渴き、私の身も、あなたをあえぎ求めています。」

詩篇 42 篇と 63 篇のダビデの敵と置かれている状況は、違いますが、でもその、ダビデの解決方法は同じです。

主なる神様を渴望するんです。

主に渴き、主を探し、主を求め、主なる神様を渴望し、あえぐほどに求めるのです。

ダビデの特徴は、皆さんも知っておられるように、数多くの患難と逆境と絶望的な状況、その長いトンネルを歩いてきた人です。

私自身そうですが、皆さんはいかがでしょう。

軽く一発叩かれただけでも、よろよろとうろたえて、落胆して、すぐ絶望に陥ってしまいますが、ダビデは、山場山場ごとに忍耐し、待ち、勝ち抜き、とうとう遂に神にあって勝利する人生を生き抜きました。

そして、神様の導きをその身に体験し、着た人であり、神の導きを達成した人でした。

「じゃ、どうやってダビデのように生きることができるのだろうか？」と考えてみますと、詩篇 42 篇と 63 篇にその答えを見つけるわけです。

自分の人生に危機が迫った時、失望や絶望や挫折して倒れることはあってもそれで終わるのではなく、なおその中で、その痛みと苦難を、神様をさらに追い

求め、掴み、渴望する機会、道具、道として用いたという事実を発見するのです。

ダビデのような危機を経験する事は中々無いかも知れませんが、この地上を呼吸しながら生きるすべての人、皆が皆、この問題、あの問題、これがあれが解決すると、また次の問題が生じ、それを解決するともっと大きな問題に飲み込まれてしまうような波が迫ってくるのが人生ならば、その時毎によろめき倒れて終わってしまう人生ではなく、そういうことが起こる度に、もっと神様を渴望し、もっと神様により頼み、もっと神様に近づき、もっと神様を掴み、もっと神様を探し求め、もっと神様と霊的に繋がる信仰を持ち続ける聖徒でありたいと願うんです。

Part Two

ただ、私たち皆、そうありたいと願いはしますが、「ただ決心するからと言って、成るものではない」という壁にぶつかることも事実です。

ただやせ我慢すればそうなれるのか、我慢して時が過ぎるのを耐えていけばいいのか、もちろん、そう言う時もあるでしょう。

でも、それ以上に大切なのが、練習するということです。

なにを？

神のご臨在をです。

キリスト教の古典の中で、「The Practice of the presence of God」という日本語に訳しますと、「神の臨在の練習」、または「神の臨在の実践」というタイトルの本があります。

18世紀のフランスの修道士ローレンス兄弟という方が書いた本です。

ローレンス兄弟は、中世にあった30年戦争で大きなけがをして足に重度の障害を負った身で、修道士として60年間生きました。

「毎日のように繰り返される日々。退屈で何も見えないように感じる日常生活に果たして意味があるのか？」という冷めたような疑問に、ローレンス兄弟は、「毎日の平凡な生活において、神のご臨在を発見する練習をする」という霊的洞察を示してくれた方です。

彼自身、毎日修道院のキッチンで働き、履き物を修理するという平凡な生活の中で、毎瞬間呼吸するように神様の深いご臨在を覚える練習をしながら、与えられた人生に神との関係を育みながら、神と親密になるという祝福へと読者を招待します。

その本の中で、彼はこんなことを言います。

「私たちの霊的生活において最も聖く最も必要な練習は、神のご臨在の練習です。この言葉の意味は、私たちの人生にご同行下さる神様の聖なるご臨在を絶えず体験し、喜び、毎瞬間どんな時でも会話が途絶えることなく、いつも神様と謙遜に、情が行き交うような会話をすることを意味します。

これは特に、誘惑と悲しみの時、神様から孤立していると感じる時、そして不誠実と罪を犯した時こそ、さらに大切です。」

ダビデも神のご臨在を常に練習していた方であったというのは、その書いた詩や生き様から見えてきます。

私たちが良く失敗してしまうのが、メッセージを聞いて「ああ、そうそう、その通り」と思いながら、いざ人生の現場に出ると、「ああ、そうそう」と思ったことの練習を怠ってしまうということです。

以前、私のソウルフードはお寿司とキムチチゲだと言ったことがありますが、初めからお寿司が好きだったわけでもなく、キムチが好きだったわけでもありません。

小さい頃は、一番好きなネタが玉子でした。

そして、嫌いなネタは、生もののネタ、特にマグロが大嫌いでした。

今は逆です。

玉子は残っていたら食べますが、自ら進んで食べません。

むしろ、マグロなどの海鮮ネタが大好きで、そちらの方を好んで食べます。

キムチもそうです。

辛いし、しょっぱいし、小さい頃の私にはご飯のおかずにはなりませんでした。

でも、それを小さい頃から食べ続けていますと、これがなくちゃご飯になりません。

白菜キムチ、ネギキムチ、水キムチ、小松菜キムチ、キュウリキムチ、大根キムチ、そして何と言っても、熟成してプンプン臭う砂糖や果物などの甘いものを一切入れていない臭くてしょっぱい白菜キムチで作ったキムチチゲ、ご飯が止まりません。（今も、生唾ゴックンです）

小さい頃から何か味覚に変化が起こったというよりも、繰り返し繰り返し食べ続けていたら、いつの間にか美味しくなってしまったというのが正直なところですよ。

イエス様は神の御言葉を、読むとか、見るとか、調べるとは表現せず、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによって生きる」と、神の御言葉は、人が毎日食事をするように食べる物だと、繰り返し食す物だと、食すことによって神のご臨在を実感していくものだと言いました。

これはとても大切な霊的原理・法則とも言えるでしょう。

何か物ごと一端になるためには、1万時間の練習が必要だという1万時間の法則というのを聞いたことがお有りかも知れませんが、（1日3時間やっただとして10年かかる時間ですが）、神のご臨在も、私たち繰り返し、繰り返し、練習しなければならぬ、神様を知っていかなければならぬ、このお方が私の内でどのように働かれるのか、危機にあった時どんな意図をもってそういう危機に合うようにされたのか、またその危機の中でどのように接して下さっている

るのか、さらには、いつもの日常の暮らしの中でどのようにご臨在し、その中に共にいて下さっているのかを覚える練習をするんです。

筋トレだけじゃなく、霊性も、神のご臨在を覚えることも、練習が必要なんですね。

そして、その練習の先にある渴望を満たしてくださる美味しさを味わい、私の内にご臨在下さる神様を知るんです。

そういった観点で礼拝を考えますと、礼拝は、神様のご臨在を練習する場、時間でもあります。

6日間、この世の種々雑多な雑音のせいで、神様の存在を感じることなく過ごしたとしても、礼拝を通して神様を経験することを望み、礼拝を通して神様を楽しみ、礼拝を通して神様の御声が私の霊の内に聞こえて来て、感激するんです。

ある方にとっては、礼拝のこの時間は、何の味わいをも無いただ何となく座っている時間かも知れません。

でもまた、ある方にとっては、この同じ時間が、お寿司のようにキムチチゲのように、礼拝の時間そのものが、礼拝で語られる聖書の話が、何にも代え難い甘い蜜のように甘くて仕方がありません。

どんなに日曜日の礼拝が、待ち遠しいか分かりません。

礼拝で神様の恵みを体験し、神の臨在の練習を通して神様に会うことが礼拝の中で起こり、その経験を持ってまた1週間、神の臨在を生活の中で練習するんです。

すると、また礼拝が恋しくなります。

神を渴望するという期待を持って日曜日の礼拝にやってきます。

礼拝を通して、教会という生けるキリストのからだ、建物、神殿にご臨在下さり、働いておられ、熱心と愛をもって着々と群れである教会を導き、また教会そのものである私たちの内に住んで下さっている神の臨在を確認するわけです。

神のご臨在を渴望するところが教会です。

Part Three

そして二つ目に、今日の教会は、聖霊の力があらわれる共同体でなければなりません。

使徒の働き 1 : 8 (パウロ)

ここにある“力”という言葉は、原文のギリシア語で *dunamis* という言葉で、英語の *Dynamite* の語源となった言葉です。

人が、毎日鬱々として、悶々として、気が減入って、力が無いように感じるのは、この *dunamis* が無いからです。

創世記6：3を見ますと、墮落し、暴虐に満ちた罪人となった私たち人間に対して、神様は、「わたしの霊は、人のうちに永遠にとどまることはない」と宣言なさいました。

それでもまた、今一度、神様は、聖霊を、聖霊の *d u n a m i s* を与えると、再宣言なさいました。

私自身毎日、心が浮いたり沈んだりしますが、
牧会者としてもっと力強く、リーダーシップを発揮して、一人一人に助けとなるような牧師になりたいけれども、そうでないという現実を見ますと、心が鬱々となり、気が滅入り、力が無いように感じます。

そんな私の中から出て来るものは、何にもありません。

そしてまたそんな時、体験する神秘が *d u n a m i s* です。

私の中から出てくるものが何もない、枯渇してしまった時、外からまた内から供給されるのが、神の聖霊の *d u n a m i s* です。

もし霊が困窮し、心が辛いならば、聖霊の恵みが必要です。

毎週、日曜日の礼拝や早天祈祷会などで聖書の御言葉を語らせていただいています。死に物狂いで準備はしますが、説教は、私の度量とか、技術とか、知識とは関係なく、そのすべてが聖霊なる神様の哀れみと慈しみと恵みにあつて成されるものだということを毎回体験します。

説教に内容がない時ほど声を張り上げ、ちょっとうまい具合に説教準備できたと思自負した時には、高慢になって空回りし、下手な説教しか出来ないことに心痛みますが、私が「あ！」と言ったことを、聖霊なる神様が化学反応を起こして「お～！」と聞こえるようにして下さるだけだと毎回思われます。

そこで悟らされるのが、「あなたの力でやっているわけではない！ あなたが出来るから恵みがあるわけでもなく、あなたが出来ないから恵みが無いわけでもない」ということなんです。

これが、神様から毎回教えられることでもありますし、聖霊の *d u n a m i s* だということです。

土浦めぐみ教会が68年間ここまで恵みの内に歩んでくる事が出来たのは、すべて神秘であり、*d u n a m i s* ですね。

昔の白黒のめぐみ教会の写真を見ますと、それを良く感じます。

神様が感動を下さる、教会は、人間の持つ何かによって成るものではなく、聖霊の *d u n a m i s*、聖霊の恵みと力と導きによって成るものです。

もうちょっと理解を深めるために、第一サムエル記のダビデの姿を見てみたいと思います。

サムエル記第一17：34－36 (パワポ)

巨人ゴリアテを前にして、40日間もの間震えおののいているサウル王率いる全イスラエル軍にあって、「お前みたいな幼い奴に、何が出来るんだ！」と嘲笑されながらも、サウル王に、ダビデが自分のやってきた事を説明している場面です。

ここで、ダビデは、「しもべは、しもべは、しもべは」と、飼っている羊一匹を助けるために「獅子と熊を自分が打ち殺してきた」と、「自分がしてきた」と、自分を主語にして語りますが、37節に行きますと、これが変わるんです。

サムエル記第一17：37 (パワポ)

「私がやったことだけれども、そのすべては主が成してくださったんです！」と、ここで、本当の主語が出てきます。

これこそ、信仰生活であり、人生を主なる神様の御手にあって解釈するということです。

「表面的には私がやった」と、でも、神のご臨在を練習し、神のご臨在を経験し、神のご臨在を楽しみ、霊的に神が私の中に住んでいて下さり、私が神の内に留まるという神秘の中で、「表面的には私がやったけれども、神様が成された」という主のご臨在の練習の結果、ゴリアテに対しても主が為さるという自信が芽生えてくるわけです。

皆さん、ダビデのような神の臨在の練習の先にある確信がお有りでしょうか。

説教は、内村鑑三が云々、ルターがカルバンが云々ではなく、その説教者が、私自身が、1週間神の臨在を練習してきた中で受けた恵み、経験、事柄について話すのが説教でありたいと願いながら、私が話していますが、その中にはどなたがいらっしゃいますか？

説教の主人公・主語は、説教者ではなく、説教の主人公は主なる神様、イエス様でなければならないですね。

そして、その説教の中に、説教者が1週間練習してきた神の臨在と、会衆が1週間練習してきた神の臨在が共鳴し合って、神の声を聞けるならば、それよりも大きな恵みがあるでしょうか。

それこそ、聖霊の *d u n a m i s* ・力です。

Part Four

また、このような聖霊の *d u n a m i s* を経験する教会に表れる特徴が二つほどあると思います。

一つ目は、落胆が期待感に変わるということです。

イエス様が天に上げられてから、ものすごい喪失感で落胆していた初代教会は、聖霊の *d u n a m i s* を経験して教会に期待感が満ち始めました。

エペソ人への手紙2：21-22 (パワポ)

成長している最中で、ともに築き上げられている途中で、聖霊の御住まいになる聖なる宮が、教会です。

つまり、エペソ書の語る教会のイメージは、工事中です。

問題が多くて当たり前なんです。

牧師も問題だらけ、信徒も問題だらけ、ごたごたして騒々しいのが教会です。

なぜならば、工事中だからです。

そんな工事中の教会にあつて、もし、聖霊の *d u n a m i s* が経験出来ないならば、そこにあるのは批判やら、不平やら、うらみでしょう。

でも、聖霊の *d u n a m i s* を教会が経験するならば、何が多いでしょうか？期待感です。

「完成していないにも関わらず、こんなに神の恵みあふれているんだから、これがこれからまだまだどんどんだんだんと、築き上げられていくんだっつらすごいことになるね〜！」という期待です。

家族・家庭も同じですよ。

聖霊の *d u n a m i s* を知らない家庭には、互いに対する批判が多いことでしょう。

「あなたが、そんなんだから！」「いやいや、お前こそそんなんだから、子供たちがあんなだよ！」

聖霊の *d u n a m i s* を経験し練習している人は、「築き上げられている最中だ」という原理を知っているので、期待感が湧いてきます。

「あなたにはこんな問題があるけれども、今の時点でこんなにも美して素晴らしいんだから、これから、どれだけ素晴らしくなるんだろう！」と、人に対して何だか、期待を持てるようになります。

土浦めぐみ教会は、失望や落胆や挫折の多い教会でしょうか？

それとも、期待の多い教会でしょうか？

個人個人も一緒ですね。

群れとしての教会も神の宮ですが、私たち一人一人も、この体も、この霊も、この精神も神の宮、神の聖霊がお住まいになる神殿です。

ということは、進めば進むほどに築き上げられていく夢、もしこの夢を教会に見られる方は、聖霊の *d u n a m i s* の内にあるんだと思います。

私たちは工事中です。 完成したわけではありません。

ある行動心理学の学者が、「子供は、親の感嘆によって成長する」と言いました。

何の力もない生まれたての子供の姿を見て、「ああ、使えない」とは誰も思いません。

やがて歩き、走り、飛び跳ね、言葉を口にするという将来の姿を思い浮かべな

がら、その時毎に「わあ！」という感嘆の声を上げて喜びます。
その親の感嘆の声をもち、子供は成長すると言うんです。

では、私たちには互いにこのような感嘆があるでしょうか？
互いに対する感嘆がありますか？

精神的に滅入ってしまったあるクリスチャンの方が、とても良いカウンセラーにあって回復したという話を聞いたことがあります。

どのように良かったのかと言いますと、そのカウンセラーの方が、一つの宿題を出してくださったそうです。

その宿題は、「一日3つ自分を褒める文章を書く」というものでした。

始めは中々書くことが出来ませんでした、宿題なのでやるしかありません。

だから最初は、「ご飯を美味しく食べる私が好きだ」というような日常の些細なことから3つずつ書いて行ったそうです。

こんなものが何になるんだろうと置いていたところ、時間が経つにつれて、ものすごい結果を生み出し始めました。

それは、自分に感嘆するということです。

キリストにあって築き上げられている最中、今はこんなにも弱く見る影もないと思えるかもしれないけれども、そこにも光るものがしっかりとあり、なお一層、完成へと向かって行っているわけです。

現在を見て、弱いところを批判するのではなく、築き上げられていくという生ける神の宮という私たちの将来を見るんです。

もっと美しく、素晴らしい聖なる聖霊の宮となる私たちがいるんです。

なので一度、夫婦同士、または友人同士、自分の良いところを3つ書いて、それを交換してみてもいいでしょうか。

提出する必要はありませんが、皆さんへの宿題です。

Part Five

最後にもう一つの聖霊の *dunamis* を経験する教会に表れる特徴は、考えの地境が広がっていくということです。

エペソ人への手紙2：21-22 (パウロ)

この御言葉に表れるもう一つのイメージは、拡張です。 広がりです。

旧約聖書のイスラエルの民たちは、神が人間の手で作った所謂動くことのないエルサレムに立てられた建物である神殿にのみ、特別にご臨在下さるという狭い神の臨在しか経験したことがありませんが、

これが新約時代、私たちの時代になりますと、私たち一人一人が、神がご臨在

下さる生ける神殿、いらっしゃらないところはないという神様のお働きに対する考え方が拡張、広げられました。

新約時代に生きる私たちが、聖霊の *d u n a m i s* を経験しますと、考え方の地境が広がります。

聖書をどんなに読んでも、どんなに祈っても、考えの地境が広がらなければ、それは、まともに聖書を読んで、祈っていることにならないかもしれません。

昔、東京タワーにしか上ったことがないあるスポーツ選手が、アメリカニューヨークのエンパイアステートビルの102階の頂上に上って眼下を見た時、涙を流したそうです。

感動したからではありません。悔しかったからです。

東京タワーでも高いと思っていた見地の狭さと、そのような自分の実績ややってきた事を誇っていた自分の高慢さがやけに腹立たしく思えたから、涙が出て来たそうです。

私たちにもそのまま当てはまることだと思います。

何をやったからと言って、こんなにも高慢なのか？

何を成したからと言って、こんなにも人を見下し、批判的なのか？

何が出来たからと言って、そんな態度を取るのか？

聖霊の *d u n a m i s* を経験すると、考えの地境が広がります。

自分しか見えないところから他者が見えるようになり、人の痛みに共鳴できないところから他者の痛みに共鳴できるようになり、助けてほしいというところから助けてあげたいと思えるようになり、与えられているものを貯めこむところから与えられたなら分けてあげたいとなり、与えられていないことよりも与えられていることに感謝を覚えられるようになり、自分の教会しか見えていないところから他の教会も見えるようになり、自分がキリストの教会であると同時にその人もキリストの教会であることが見えてくるのが、聖霊の *d u n a m i s* です。

Conclusion

教会の主であられる御霊なる神様は、私たちに主イエスの十字架へと導くお方です。

だから、聖霊が働いて下さる教会は、キリストの十字架が生きています。

イエス・キリストが生きておられることを体験します。

イエスの御名が表れます。

何よりも、イエス・キリストの名を大事に思います。

土浦めぐみ教会が、主イエス様の十字架を何よりも大切にし、慕い、美しく素晴らしく建て上げられている最中の恵みの共同体、生ける神の宮であることを願ってやみません。

そして、その教会そのものである皆さん、私たち一人一人が、主イエス様の十字架を何よりも大切にし、慕い、美しく素晴らしく建て上げられている最中の恵みの人、生ける神の宮であることを願ってやみません。

お祈りいたします。

祝祷：詩篇 63：1 b